

# 和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO 法人百年の森づくりの会

2010  
10.1

20号

巻頭 「治山治水」……1 / 平成22年度第3回通常総会開催……2 / 新役員就任挨拶……3 / 通常総会記念講演会要旨……4-5 / さいたま文学館 企画展「森は海の恋人」……6 / 情熱と実行力……7 / 和名倉山森づくり報告……8-9 / 太陽寺植林地ネット張り・長瀬宝登山下刈り報告……10 / 長瀬苗畑作業報告……11

## 治山治水

理事長 内藤勝久

「おかしいな、ここは山形県？」頂上で地図を広げていた常務理事の吉田さんがつぶやいた。「鳥海山は秋田の名山なのに」。昨夜は象潟に泊まってすっかり秋田モードになっていただけに、わたしも理解できなかった。地図を覗き込んで見ると県境が曲線ではなく直線になっているのではないかと。「たぶん本間さまが買収したのかもしれないね、庄内平野の米を確保するために」と私。

数年前から愛用している富山和子氏の「日本の米カレンダー」に残雪の鳥海山と麓の水田風景が掲載され、概略につきのような解説が付されていた。「鳥海山は雪が多く雪解け水は田を潤すが、冷たすぎて稲には適さないで、田よりも一段高いところに水路を作り、自然の温度に戻してから田に引き込んでいる」。印象に残る解説だった。とっさにこのような大規模な水路をつくるには莫大な資金が必要だが、それを必要としそれができないのは本間さまをおいてほかになからうと推理したのだ。ざれ歌に「ほんまさまにはおよびもせぬがせめてなりたやとの

さまに」と唄われるほどの大富豪。本間久四郎光丘は私費を投じて酒田の海岸80kmに防風林を造成している。

ところで治山治水という言葉はだれの造語であろうか。文献を調べてみたがよくわからない。これも推測になるが戦国時代の武将が言い出したのではないだろうか。伊達政宗や松平定信は植林を奨励したし、武田信玄や加藤清正の堤防づくりも有名である。戦国時代の武將は、一

国を治めるための要諦が農林漁業の振興とそれを支える水と土壌にあることを学習でまたは直感で知っていたに違いない。「治水は治山にあり」といわれる。急峻な山がせまる平地に暮す人々にとって、大雨が降るたびに大規模な土砂崩れや大洪水が発生し、命や財産を脅かされることは一国の存亡に関わるだけに、為政者にとって「治山治水」は最優先の政治的課題であったはずだ。そのための第一歩は森林づくりから始まることは論をまたない。しかし時間と労力と資金がいる事業だけによほどしっかりと信念がないと完成しないことも事実である。

最近地球温暖化が進み、生物の多様性が失われつつあることがマスコミでとりあげられるようになり、森林のもつ多面的機能も認識されるようになってきたが、本気で森林づくりにとりくむ意志のある政治家は皆無にひとしい。世論が高まっていることがその最大の原因であろう。我々はいままで百年の森づくり運動にとりくみ、それなりの成果も上げてはきたが、世論を醸成するまでには至っていない。世論に訴える努力が不足していたといわれても仕方がない。

しかし13年間にわたり私たちは、「培えば大輪の花開く。咲こうとすれば焦らず根を張ることだ」という先人の教えに従って、大地にしっかりと根を張ってきた。荒川最大の水源林「和名倉山」を活動の源流とする当会にとって、ブナを中心とする落葉広葉樹の植栽とシラビソなどの針葉樹の食害防止は、和名倉山の治山治水活動そのものであり、これを軌道に乗せ後世に繋いでいくことが、世論という大輪の花を咲かせる確かな道筋である。

# 平成22年度第3回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成22年度第3回通常総会が、5月30日(日)別所沼会館において開催されました。

当日は、平成21年度事業報告・収支決算案、平成22年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

また、理事の退任に伴い、理事の補選選任案を提案し、満場一致で原案通り承認され、新しく大熊光治氏と守谷裕之氏が選任されました。



現役員は、以下の通りです。

(敬称略)

理事長 内藤勝久

副理事長 小林公彦 高岡正彦

東 克明

常務理事 石関明稔 小室正人

野澤和雄 吉田兼紀

守谷裕之

理事 浅野純次 坂本和穂

大熊光治

監事 宇津木正晴

玉熊英一

これからも宜しくお願いいたします。

総会終了後、「日本の泥 西欧の石」と題して、麗澤大学教授松本健一氏をお招きして記念講演会を開催しました。

(講演の要旨は4〜5頁に記載)



「通常総会 記念講演会」

## 役員就任にあたって 大熊 光 治

## 新役員就任あいさつ 守 谷 裕 之

百年の森づくりの会は埼玉の母なる川「荒川」流域に木を植えて、12年になります。その間、植林、森林の下草刈り、苗づくりなどの体験学習を実施し、多くの成果を上げてきました。森に木を植える活動は、成果がはつきり現れないようです。

私は埼玉県の山々から流れる川の水生昆虫を約40年間見てきました。秩父の人々に水生昆虫のことを尋ねると、昔は多く生息していたと言います。調査結果を調べても昭和30年頃まで多かったです。最近の様子を聞くと、水生昆虫は少なくなつたと言います。その理由は河川改修、杉の植栽などを上げます。その要因はよくわからないようです。

岩手県室根町と気仙沼市舞根町の人々は室根町の山に木を植えてきました。約20年が経ちました。10年経つてから徐々に成果が現れたようです。室根町の山から流れる大川は26Kmで気仙沼湾に流れます。海の生産高を高める栄養が山から運ばれてくることは感覚的に知っていました。したがって、流域の人々は森に木を植えることを運動として行っていました。地道な活動で科学的

な根拠はなかったです。その後、多くの研究者によって森の果たす役割が科学的に明らかになってきました。落ち葉の腐葉土からフルボ酸が生成され、これが鉄イオンと結合し移動します。鉄イオンは植物に吸収され、植物の成長のために行う光合成に大きな役割を立たすことが明らかになりました。

百年の森づくりの会は、100年を目標に森に木を植え、その成果を期待しています。「森は海の恋人」植樹祭は森に木を植え、20年で成果が現れそうです。荒川は全長160Kmです。東京湾での成果が現れるのは、もう少しかかります。しかし、100年まではかからないでしょう。

森に木を植える活動の取組を通して、流域に住む人々の自然環境への対処の仕方が意識化から習慣になることが必要です。このことは、流域の人々の心にも木を植えたことになります。「百年の森づくりの会」の運動が、荒川の水生昆虫も増え荒川の生産性が高まり、東京湾の生物の多様性が高まることを期待します。

一昨年に30年間の教職にピリオドを打ちまだ5年を残しての早期退職である。やりたいことが有り、定年まで続けるとおそらくその気持ちが無くなってしまうと思われたからである。それは木工である。子供たちに木工を教えていたが本格的に木の作品を作ってみたいという気持ちだけはあった。そして、漠然としてではあるが死ぬまで木を削り続けたいとも思っていた。木の作品を見たり、木に触れているだけで何となく気持ちが落ちつく。いつかこんなすばらしい作品が自分の手で作れたらいいなあと憧れていました。

百年の森づくりの会のスタートはワンダーフォーゲル部のOBが集まり、山にお世話になったというのでその恩返しだと聞いていた。僕は中学校の教員時代に部活動の一環として子供たちを山に連れて行き、一緒に森作りに参加して来た経緯がある。学校という密室から外へ連れ出し新しい空気を吸わせたい、色々な経験をさせたい、だがなかなか自分一人では出来なかった。子供たちに「百年の森づくり」の話をしたら、行きたいと声が上がった。夏休みはバン

ガローに泊り、川原遊びや自分たちが食べる食事を作った。その時は女子も参加したのを思い出しました。蜂が出てきただけで大騒ぎになり下草刈りにならなかった。暑さの中、黙々と下草を刈っていた2年男子生徒もいました。本当にその当時はお世話になりました。

その恩返しになるかどうか分かりませんが、今は木を加工するいわば消費の立場になってしまいました。木工で言うナラの木は植林したことのあるミズナラを材料に使う。西洋ではブナは家具に使われている。秩父にシオジの巨木があるという、一度見てみたいと思っている。製材したシオジの大きな一枚板に触れたことがある。そんな無垢の木を僕の手で加工してテーブルを作ってみたくて木を育てるのも重要であるがその木を生活の場で生かすことも出来たら素晴らしいと思う。まだまだ分からないことだらけの中で、百年の森づくりの活動を通して木の種類や成長を実際に見ることができ、森の大切な役割を学ぶこともできる。少しでもお役に立ち、皆さんと一緒に仕事ができれば幸いです。

NPO法人 百年の森づくりの会  
平成22年度通常総会 記念講演会要旨

## 『日本の泥 西欧の石』

講師 麗澤大学 教授 松本健一 先生

私の「泥の文明」という本は、2006年に書いたものでありますが、実際には泥の文明の3年前に、「砂の文明、石の文明、泥の文明」という本を著し、そこにはヨーロッパ、アラブ、アジアを対比した

の劣化によって文明は必ず減っていくのだ、ローマ文明でも、実は土壌が劣化すると減っていくんだということを書いている。

風土論あるいは風土的な文明の考え方ですね、思想というのは頭の領域の中ですけれど、風土というのは、人間が歩いて、その風を感じ、水を飲み、そしてそこで植物を育て穀物を取るというリアルワールドです、現実の土地というものが書かれているわけでありませう。

これは、おもしろい発想ですが、しかしそのような土壌というものも、私はヨーロッパは土の文明でなく、むしろ石の文明である。ギリシャ文明が盛んに興ってくると、燃料が大量に必要になり、森を伐ってしまった。はげ山の状態にしまい、人間が暮らしていけなくなつてギリシャ文明が減っていく。そこに住み続けられる人がいないと文明は滅びる。ローマ帝国は50万人しか住めない。水がない、そのためアペニン山脈から20kmの水道を造った。道だけでなく水道を造った文明であった。水が無くなると、周辺の土地を荒らしてしまつて、全て劣化させてしまつて、その結果ローマ自体が減じる。西洋の土地は痩せている、痩せていたわけです。

けれども、ヨーロッパの学者、政治家にしても実際にはあまりその土地を知らないで書いている人が多い。今年出た本で、これは2007年にアメリカで出た本の翻訳ですが「土の文明史」という本が出ました。これを見てみると、アメリカの中でも土というもの注目する思想家、風土というものに関心を持つ学者が出てきたと思えました。しかし、おもしろいことに、この人は決定的な間違いを犯している、思想の欠陥がある。

豊かな土地、劣化していない土壌がどれくらい厚さによって、文明がどれくらい永続することが出来る差にもなつてくると言っている。

我々は、アメリカの土地は豊かであると思いがちだが、豊かな土壌は、実は厚いところで20cmしかない。表土の中に農作物は出来る。日本では、表土は厚いところで1m、薄いところで40〜50cmぐらいある。表土の厚さで、文明をどれくらい永続させることが出来るかということでありませう。アメリカのサウスカロライナ、バージニアなどでは黒味がかったところで、一番厚いところで10インチ(24cm)です。普通、樹は育たない、牧草しか生えない。牧畜しかできない、農業は基本的に出来ない。

この人は、地形学者である、彼は24cmで豊かな土地であるとの考えであつて、この本の決定的に欠落しているのは、麦とかトウモロコシは、24cmの土壌でも出来るが、実は土壌はちゃんと手入れしてやらないと、使い続けることが出来ないと思つて書いている。「土の文明史」で言っている土壌は、麦とかトウモロコシを作る土壌、畑、土地で、そこには「米」の問題は入ってこない。この本は、西洋文明史を扱っている。逆にいうと、この本の著者モントゴメリーさんは、アメリカ人で基本的にヨーロッパのことやアジアのことを研究しているが、実際にアジアの土地を踏んでいない。踏んでいないのは中国の黄河沿いの所だけです、トウモロコシ、麦、コーリヤンを作っている、私の地図では、黄河は泥の文明圏に入つてはいない。泥の文明圏を創っているのは「米」です。

泥の文明圏に生えるものはイネ科の内の「米」なのです。穀物の中で一番豊かなものである米を見出していったのが日本です。日本の国は、豊葦原の国、葦あし(牙か)の国、瑞穂の国で水田で米を作る国です。

インドのカルカッタ《コルコツ》の意味は、葦の生える沼沢地という意味である。日本と同じ葦の生える地名、水の多い泥のような風土と考えた方がいい。そこで、一番人間を養ってくれるのは「米」であります。稲であるというふうに見出していった。

稲と麦の違いは、表土の厚さです。一番厚いところで24cmしかないオーストラリア、中国の北の方では10cmしかない。そのようなところでは、米は作れない。麦を作る。麦は地中の水分を吸い出して、地中の水と一緒に、地中には必ず塩分があるので塩分も地表に吸い出してしまふ。麦は塩を必要としないので、結果として地表には塩が残る。だから、中国、オーストラリア、アメリカは3年麦を作ると、地表が全部真っ白になってしまふ。地中の水を吸い出して、塩で真っ白にしてしまふので、1年休むことになる。連作が出来ない。ところが、米は千年連作しても大丈夫です。何故かというところ

米は地中の水を吸うと見えながら、梅雨の時に降った雨、雪解けの水そして台風の水というようなものが山の上から流れてきて、その地表を流れる水を吸い上げて生育するのがこれなのです。

だから、地中の水を吸い上げていないので塩気が外側に出てくることはない。山から流れ出てきた水が、毎年毎年使われるという形です。百年も千年も同じ所に定住して、米を作り続けることが出来る。この違いは、この土の文明史には書かれていない。それぐらいの違いがある。このような欠陥があることを、書評の中で指摘をしたが、そのような、人間を養っていたいけるような穀物が取り続けなければ、必ず長い間の文明の歴史の中で、その文明は滅びていく、衰退していくとこの本の中に書かれている。

考えてみると、アメリカさえ10インチしか表土が無い、ヨーロッパはもっとひどい、西洋、北欧は表土がほとんど無い。ギリシャも薪にした後、千年も何も生えてこない。

泥の文明圏で言うと、表土が30~50cm、場合によっては1m、そのようなところで、千年も作り続けられるものが「米」である。

砂漠の民(サハラ)は、何でこ

んな不毛の土地に住むのか?、逆に泥の文明の人々は、何であんな汚い土地に住むのか判らないと言う。我々は豊かな土地だと思っているが、病原菌とかアメーバとか破傷風菌、マラリア、結核があるじゃないか、あんな汚い所に住むのが判らない。

生物は、海の中から発生した。陸上になると、水辺を避けたいと思う。人間を死に至らす生物も水の中にいる。だから、出来るだけ遠ざかろうとして行ったのが一番乾燥している砂漠です。不毛と言われようとも、あんな不潔な所にいられるかと思つて、砂漠の周辺に住んでいる。風土と宗教を調べてみると、イスラムの言葉の中に「清らか」という意味を含んでいる。中国のイスラム寺院は、清真寺、清浄寺という名を持っている。「清らか」という字が入っている。これは、イスラムの清らかに生きたいという宗教の価値観に立脚している。それは、実は砂の風土に住もうと思つた人々の、清らかに在り続けたいと思つた文明の理念です。そのような違いがあると思ふようになった。

しかし、砂漠の風土は、石の風土のヨーロッパよりはるかに過酷であり、石は動かないが、しかし砂漠は砂嵐とともに動いてしまふ。木もほとんど無い。木の生え方が

異なる。30年で木が大きくなるのは、泥の文明圏しかない。

日本という国は、木を植えて、木が生える風土です。木を植えた神話が残っている。木に囲まれて生きてきた。山に残し続ける。山から、水田が水平の平野に下りてくる。出来るだけ木を残そうと思つていた。木が無くなると腐葉土が、水の保水効果が無くなる。日本の文化が創られてきた。そのように、アジアの風土であることは、米作りの風土であると同時に、森がいっぱいあるという形であつて、日本、アジアの風土の中で出来てくる文明は、木の風土、森の文明であるというふう言い方をする人もいます。日本には木が多いといった場合、それを単に森林と言わないで、どのような種類の木なのか、他の国の森林とどう違うのかというところまで考えていくことが、これから我々は必要になってくると思う。千年の森を造り続ける、百年の森を造り続けるのには、どうゆう木を植えた方がいいか、それは生命が長いと言うからだけでなく、日本人の精神に合つて、それは日本の元々の風土に合っているということを良く考えていなければならぬと思つています。

さいたま文学館

## 企画展 「森は海の恋人」

さいたま文学館（桶川市）で4月～6月に、「森は海の恋人」運動の大きな原動力として「文学」の力があつたことをはじめ、「森」「海」そしてそれらをつなぐ「川」に関する著作を、埼玉ゆかりの作家の作品から照会しようとする企画展が開催されました。5月8日には宮城県気仙沼で植林活動が続ける畠山重篤氏が記念講演を行いました。当会は本企画展に協力し、展示図録に内藤理事長が寄稿し、活動記録のパネル展示をいたしました。

「森は海の恋人」を合い言葉にした植林運動は、気仙沼で牡蠣養殖に携わる漁師・畠山重篤氏が始めたものです。海の環境を守るために山を保全しようというこの運動は、漁師たちを中心に20年以上もつづけられています。

さいたま文学館では、この春、同じテーマで企画展を開催しました。環境問題と文学は一見何の関係もないように思えますが、この運動の合い言葉が、ひとつの短歌から生まれていることを紹介したいと

考えたのです。

森は海を海は森を恋いながら  
悠久よりの愛紡ぎゆく

これを詠んだ熊谷龍子氏は、気仙沼湾に注ぐ大川中流地域に暮らす歌人。自宅の周囲にある柞（コナラ・クヌギなどの古称）の森からのメッセージを歌に託しています。龍子氏の詠む歌は、同じ歌人として活躍した祖父・武雄の想いを繋ぎ、その武雄の想いは埼玉ゆかりの歌人・前田夕暮にも繋がってゆくことが、展示の準備を進めていく中で次第にわかってきました。

夕暮は奥秩父で森林伐採の会社を経営していた人物で、山仕事をしながら多くの歌を詠み続け『原生林』や『耕土』等の歌集を発表しました。豊かな自然環境が創作意欲をかきたてたのか、一日のう



ちに短歌158首を制作したことが伝えられています。展示で紹介した夕暮の作品には、森を想う暖かな眼差しがあります。そして、夕暮も願っていた「森づくり」が、現在「森は海の恋人」を合い言葉に多くの人々が取り組んでいることとの不思議を想うのです。

この企画展は、「文学」を違う側面から展開してみようという試みでした。御観覧くださいった方々が、文学に親しみを感じてくだされば幸いです。



## 情熱と実行力

作業日 2010年5月22日～23日

峯川正行

和名倉山は初めて7年前に三ノ瀬から登った際に懐の深さに一目惚れしてしまい、その歴史を調べていくうちにそれに引き込まれてしまいました。そして、百年の森づくりの会の活動もネットで知るようになり、すぐに賛同し会員になったのです。まずは現地活動に参加なのですが、なかなか都合が付かずに数年が経ってしまいました。今年こそはということでもうやく参加ができました。

荒沢橋でブナの冷温保存されていた苗木100本を見て驚きました。一体これをどうやって担ぎあげるのか。もちろん自分たちです。16名の参加者の皆さんと一緒に分担して持ちます。私も初めて背負子を使って登っていきます。

仁田小屋までの50分は本当に苦しかったです。これほどの苦行は久々でしたが、和名倉山のため

ならば頑張らなくてはという思いで、ふらふらな状態で仁田小屋に到着です。しかし、この小屋は素晴らしい！皆さんの情熱がこれほどの小屋を建立させてしまったのかと！この実行力は凄いです！そして中川さんが水力発電を作りたいという事で色々実験をされていて、私もそのような開発が大好きなので一緒に参加致しました。私の方でステンレスの板金を用意する形で中川さんの情熱に協力できればと思います。

少々休憩し、仁田小屋の頭直下が植樹エリアです。スズタケ刈りをされていたので、鍬も入れやすく、作業がとてもスムーズに進み100本の苗木も2時間ほどで全て植樹完了となりました。

私にとっても初めての植樹作業であり、鍬を持って土を掘るのは初めてでした。植樹の方法もベテ

ランの方に親切に教わりました。まずは土の表面の葉などの腐葉土のようなものは一旦払いのけ、土面が見えた状態で鍬を入れ掘ります。この掘った土は水分を含んだものなので、苗木を入れた際にこの土で埋めて、足などで踏み込みます。その際も土は根のすぐ上くらいまで埋めるのが最適とのこと。根のかなり上まで土を被せてしまうと、根を出そうとしてそちらに栄養が回り、木が成長しないのです。最後は下の土が乾燥しない払った葉や腐葉土を軽くかけておくようです。なるほどと納得しっぱなしでした。

ただ土を掘って、苗木を植えればいいというわけではないのです。このブナがこの和名倉山に根を下ろし大きくなっていくことを祈りながら小屋に戻りました。小屋では夜が更けても和名倉談義が絶えませんでした。

今回は初めての植樹作業の参加でしたが、皆様の情熱と実行力には本当に感服致しました。最近の人たちは口先だけは立派な事を言いますが、行動を伴わない方はかなりなので、驚きと嬉しさがこみあげてきました。10年かけてここまで成し遂げてしまうことは素晴らしいです。今後は我々の世代をもっとこの和名倉に呼びよせなくてはと思いました。



# 2010年度上半期 和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当 高岡正彦

第26回和名倉山森づくり事業 となり植林しました。これは段違い

は5月22〜23日に行いました。の活着率で成長してくれています。

和名倉山への植林は、最初、東 この苗は、冷温保存の際、根につ

京大学演習林での研究に使われて いた土は払ってしましますので、

いたブナを譲り受け、植林しました。 大きなものでも2kg程度です。

これは2mほどに育った苗で、根 そして冷温保存では仮眠状態になり、

に土をつけたままでしたので、大 それを植林すると一気に根を伸ば

きいものは30kgほどありました。 すので活着率がいいのだというこ

その後は、秩父山塊の実生のブナ とです。

の苗を牛乳ポットで成長させ、2 今回は昨年暮れ、自前で冷温

0cmくらいになったものを植林 保存しておいたブナを植林するこ

することを続けています。これら とにしました。

は植林のしかたが悪いのか活着率 今回の参加者は1週間前の時点

はあまり良くなく、そしてなか 8名でしたが、直前に追加申込

が大きくありません。そんな折、 者があり、総勢15名になりました。

日本大学での研究に使われていた そこで、急遽、冷温保存しておい

冷温保存ブナをいただけることに たブナ全部100本を植林するこ



とにしました。とは云うもののそ

のほかの装備もそこそこあり、結

構の荷物になってしまいました。

皆苦しんでいたようでしたが、事

業担当者（私）まで一言も不満の

声は届きませんでした。皆さんお

疲れ様、ありがとうございます。

そして今後もよろしくお願いいた  
します。

植林地は、仁田小屋の頭（15

55）付近としました。温暖化の

ことも考慮して、ブナにとっては

やや標高は高いのですが、このあ

たりにスペースがあるので、ここ

に植林をすることにしました。前

もって、地ごしらえはしておいた

のですが、スズタケの根が深さ1

5cmほどあり、それを押しわけ

て植え付けは結構大変でした。1

00本の植林ということで、1人

につき6〜7本植えなくてはなり

ません。しかし、2時間の作業で

植林は完了しました。





今回はいつものメンバーのほか  
に埼玉県山岳連盟から3名東京都  
山岳連盟からも1名参加いただき  
ました。最近、参加者が減り気味  
でしたので、とてもうれしいこと  
です。参加者の広がりも今後に期  
待してしまいます。

小屋に戻ってからは、水力発電  
のための水量観察を行いました。

この小屋はもちろん電気が来てい  
ません。灯りだけならロウソクや  
ランタンで足りるのですが、もし  
わずかでも電力があれば、通信機  
器等でこれまで以上に安全・効率  
を上げることができると考えてい  
ます。

夕食時には、いつものように自  
然保護談義。百年の森づくりの会  
の活動は、足掛け133年になります。  
これまでの歴史を振り返りつつ、

今後の活動を、皆で語りました。  
翌23日は、天候が崩れるとい  
う予報があり、小屋の片づけをし  
ただけで下山しました。ネット張  
りの作業ができませんでしたが、  
この雨はブナの苗にとっては恵み  
の雨だと思います。

# 2010年度上半期 大陽寺植林地ネット張り

大陽寺百年の森づくり事業担当

高岡正彦

1 植林地全容



2 栗の木



3 シカの食害



4 鹿の糞



上の4枚の写真は6/19の写真です。ツル、下草はほとんどありませんでした。

大陽寺百年の森づくり事業として、6月27日に、ツルきり・除伐ではなく、鹿による食害被害を受けた木にネットをつける作業をしました。

ツル、下草などほとんど無く、栗、ブナ、ミズナラはよく育っていました。しかし、いずれも鹿の食害を受けていました。

そこで、食害を受けている木にネットをぐるむようにしました。40本の木にネットをつけましたが、まだネットを巻ききれない木もたくさんあります。今後、すべてにネットをつけたいと思いますが、まずは、ネットをつけた効果も見てみたいと思っています。

実は、この植林地をとりまくネットが大きく壊れていて、鹿が自由に入れる状態になっていました。



今回の作業は7名で行いました。今後も、この植林地は大陽寺の住職とも協力して、豊かな森に育てたいと思っています。



2010年8月22日(日)

## 長瀬宝登山 下刈り活動報告

長瀬宝登山百年の森は、2007年10月28日に植樹祭が行われ、はや3年が過ぎ、苗木を育てる夏の下刈りも、2008年夏、2009年夏に続き3年目の草刈りです。

8月22日当日は、宝登山においても36度を超す猛暑でしたが、参加申込の方全員47名が参加してくれました。特に、三井住友海上火災保険株式会社大宮支店から23名の方が参加してくれました。また、一般参加でも、2名の女子高校生が参加してくれました。

9時20分にはロープウェイ駅駐車場を出発、徒歩、作業車、ロープウェイとそれぞれの方法で現場に向かい、熱中症と蜂に十二分に配慮するよう注意があり、10時には2班に分かれて作業にかかりました。下界よりは、いくらか涼しいとはいえ炎暑の下での草刈りは、経験者でもたちまち音をあげるほど厳しいもの

# 長瀬苗畑作業報告

常務理事

野澤 和雄

四月十八日(日) 参加者 6名

作業 ポット苗内の除草作業と苗を  
内容 大型のポットに移植。ポット  
内は、一番下に鹿沼土を入れ  
腐葉土と黒土を5対5で混合  
したものベースにいれまし  
た(枝ぶりに比べてポットが  
小さすぎて傾いて枯れてしま  
ったものがありました。)

八百鉢処理できました。

五月十六日(日) 参加者 8名

作業 ポット内の雑草取り&苗を大  
内容 型ポットに仕立替↓八百鉢完  
了(南から2棟目迄終了)

急に雑草が繁茂して建屋の廻  
りを覆いつくされたようです。  
直植の十七年生の水上樾の畑  
は、雑草が除去され苗間に積  
みあがっていました。

石坂さんの奉仕作業のおかげ、  
覆屋廻りの畑のへりは、星野  
さんの奉仕作業のたまもので  
す。

六月十二日(日) 参加者 5名

作業 青空の下、西武秩父駅で待合  
内容 わせして中津川の渓谷へ向い、  
大若沢の出合で河原へ入りま

した。

樾の稚苗の姿は全くなく水植  
だけ大きく葉をもたげて私達  
を待っていました。

王環のキャンプ場先まで同様  
でした。五百本ほど採取して  
長瀬苗畑に戻りポット苗に仕  
立てました。五人の終日作業  
でした。

六月十九日(土) 参加者 9名

作業 大型のポット苗に仕立直し九  
内容 百鉢。

牛乳パックは経年変化でポッ  
トの役をせず適時な植替作業  
でした。(南から3棟目迄)終  
了。

今日はアラカシ、シラカシが  
多かった。十七年生・樾畑の  
手入の良さが目立ちました。

七月十一日(日) 参加者名 8名

作業 大型のポット苗に仕立直し。  
内容 八百鉢 今日で4棟全ての苗  
の移植完了。

最後に水撒き作業が楽しめま  
した。ポンプ・タンクを新調  
してもらったお陰です。  
覆屋の桁高も高く補強され荒

川の風が枝葉の間を気持ちよ  
く通り抜けていました。

犬樾・水植・塩地・イタヤカ  
エデ・イロハモミジ・カツラ・  
ケヤキ・栃の木・アラカシ・  
シラカシ・クヌギと苗が出番  
を待っています。

前半の苗畑作業は終了しました。

しかし苗の世話をするというのは、  
建物とか機械と違って一度やったら  
それで終了というような事と違いま  
す。子供を育てるのと同じでかわい  
がって生長を楽しみにすると言う様  
な気持ちがないと難しいと感じま  
した。世話をしてくれるメンバーが  
固定しがちです。でも並木利夫先生、  
星野信次、石坂幸一、川村久一、平  
山富子、佐藤清章、成澤秀雄、小林  
副理事長各氏は、ほんとうによく参  
加頂いて感謝します。頭が下がりま  
す。

山の段取をうまくつけて百年の森  
の会員全員で山に戻してやりましょ  
う。それが苗達の望みなんでしょう  
から。



でした。各自持って行った水分も、  
皆さんすぐに無くなって、補給が大  
変でした。しかし、皆さん山の苗木  
のため一生懸命草を刈っていただけ、  
11時30分にはおおむねの草を刈  
り終わり、作業を終了し下山途中の  
沢で、鎌を研いで道具を片付け、事  
故、怪我もなく活動を終了すること  
が出来ました。

参加された皆さんには、本当に暑  
い中ご苦勞様でした。

(事務局)



「雲取山」

和名倉百年の森 第20号 2010年10月1日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会 内藤勝久

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0063 さいたま市浦和区高砂三丁目12-9 農林会館地下1階 TEL/FAX：048-831-1469

<http://www.100nen-forest.org> e-mail：[info@100nen-forest.org](mailto:info@100nen-forest.org)